

## 新刊紹介

### 全国ろう児をもつ親の会(編) (2008) 『バイリンガルでろう児は育つ』生活書院、173p.

佐々木 倫子

かつての日本は移民の送り出し国であったが、1980年代の労働人口の不足は、日本を取り巻く人の流れを逆転させた。近年の日本はニューカマーと呼ばれる外国籍の人々の受入れ国となり、日本の学校制度の中でも、外国にルーツを持つ子どもたちが増加している。受け入れ開始当初は、彼らに対する日本語・日本文化への同化主義教育一辺倒だったマジョリティ側も、彼らの存在が可視化されるにつれて変わってきている。マイノリティの生徒たちの母語・母文化の尊重、そして、母語保持への関心も、国際理解教育などの視点も加わり、徐々に育ちつつある。

ところが、このような動きの中で、依然として可視化されない“隠れたマイノリティ言語・文化集団”がいる。聞こえに「障害」を持つ、ろうの子どもたちである。ろう児の第1言語は日本手話である。それは文法構造も話者コミュニティも持つ、独立した自然言語であり、背後には豊かなろう文化の世界が広がっている。しかし、その事実を知るマジョリティの人々は少数に限られている。ろうコミュニティの核ともなるべき、聾学校の関係者の間ですら、ろう者の言語文化である日本手話とろう文化が正当な扱いを受けているとは言い難いのである。多くのマジョリティによるろう者への無自覚な抑圧は、現在も続いている。

本書はこのような背景の中で出版され、以下の特徴を持つ。

- (1) 本書は日本手話と書記日本語によるバイリンガル教育をわが子が受けられることを願う、あるいは、わが子に受けさせたかったと考える、保護者たちによって編集されたものである。日本のどこでろう児が生まれても、その親子が望めば、バイリンガル教育が受けられるようにという願いが本書を生み出した。
- (2) 国内のろう教育が抱える問題を指摘する出版物は、これまでもある程度の蓄積が見られる。本書はそれに加えて、カナダや北欧等の世界の手話とろう教育の現状や課題、教育実践が紹介されている。
- (3) 本書はもともと、ろう児の保護者に対する講演などが出発点となっている。文体としては書きことばに整えられているが、内容的には研究書というより一般読者に向けて書かれたものである。

本書は5つの章からなる。第1章の木村護郎クリストフ「言語的少数者の教育としてのろう教育」は、音声言語的少数者とろう者の異同を整理し、ろう者を言語的少数者として明確に位置づける。そして、「障害者から言語的少数者へ見方を転じると、ろう児は言語的少数者のなかでもきわめてバイリンガル教育の必要性が高い、と結論づけられる」(p.29)のである。論文の最後で言及されるブレイス語による自主教育運動の進展はまさに日本のろう教育の明日を示しているかのようである。

第2章のトーヴェ・スクトナブ＝カンガス「バイリンガル教育とろう児の母語としての手話言語」は危機にさらされている言語の話題から手話言語の数へ、さらに、憲法で手話言語を認めている38カ国が挙げられる。その上で、日本で手話言語が公的に認められていない現状を指し、「日本の皆さんはいったい何をしているのか」(p.41)と問いかける。言語が消滅する理由が述べられ、ろう者の場合、「手話言語が主な授業言語でないなら、それは減算的な同化政策である。(中略)減算的同化政策によってろう児を教えることは言語抹殺である」(p.46)と述べられる。論文はさらに、言語的人権、新帝国主義的支配、「母語」の定義などを採りあげ、日本でもろう者のための、ろう者によるプロジェクトを始めることを提案して結ばれる。

第3章、ジム・カミンズ「手話力と学力との関係に関する研究」では、第1言語であるアメリカ手話(ASL)の力と第2言語である英語の読み書きの力や学力との関係に関するこれまでの多数の研究が取り上げられている。そして、就学前に言語を通して概念的基盤をしっかりと獲得することが、その後の英語の読み書きの力の発達の前提条件であること、学齢期の学童のASLの力と英語力とが常に有意の関係にあること、などが、種々の実証的な研究実績によって示されている。「これまでの研究データから明らかなのは、(ろう者家族であれ、聴者家族であれ)ASLの力が高度に伸びた児童生徒は、英語の読み書きの力も十分伸びる可能性がより大きいということである」(p.110)と結論づけられ、カナダのオンタリオ州政府の教育政策に提言がなされる。第1言語の獲得の重要性、それが、人工内耳移植をするろう児にとっても同様であることなどからなる氏の提言は、日本におけるろう教育の今後を考える上で非常に参考になる。

第4章、ケーシュティン・オールソン「スウェーデンのろう学校より」ではスウェーデンにおけるろう学校の略史、手話の位置づけ、そして、バイリンガルろう教育の歴史がごく簡略にまとめられている。短いとはいえ、この章も日本での教育実践上参考になる点が多い。

最終章の佐々木倫子「日本におけるバイリンガルろう教育」では、まず外国にルーツをもつ子どもたちとろう児がそれぞれ複数言語とどのような関係にあるかが対比される。「バイリンガル」の定義を経た上で、家庭、学校、コミュニティという3つの場におけるろうバイリンガル教育が取りあげられる。日本での教育実践を考えるにあたって、それぞれの場でどのような課題があり、どのように推進されるべきかの一端が提示されている。

以上が概要であるが、本書がやり残したことは少なくない。人工内耳手術がかなりの勢いで普及しつつある現在、小さいマイノリティ集団であるろう社会はさらに分断されつつある。ろう社会はそもそも聞こえの程度によって様々なろう者がいるだけでなく、失聴の時期によって日本語が母語なのか第2言語なのかも異なってくる。さらに、親が聴者であるかどうか、同じろう者だとしても日本手話を使うろう者か、手話禁止の聾学校で育ったろう者かによっても異なりが生じる。使用される家庭言語が異なってくるだけでなく、その言語に対する態度・帰属意識が異なってくるのである。どこの聾学校に通ったのかでコミュニケーション手段が異なってくることもあり、さらに、普通校へのインテグレーションをしたろう者は、また、異なるアイデンティティを持つ。

そして、現代は、人工内耳手術を受けるろう者、受けないろう者という分断もある。手術することで、一度は失った音が蘇る思いをする中途失聴者の成功例を聞かたわら、聞こえに問題をかかえ自分のアイデンティティを模索し続けるろう者、装用をやめるろう者もいるのである。このような分断されたマイノリティ集団それぞれに的確、かつ、具体的なバイリンガル教育像を描くには、本書のページ数があまりに限られている。あくまでも、概論的位置づけにとどまっていることは確かである。しかし、このような概論書がまだまだ必要とされているのが、現在のろう教育の世界である。

(桜美林大学)